

秋聲の句碑 西福寺に刻まれた文学の縁



塩尻市下西条の西福寺に足を運ぶと、境内にひっそりと佇む句碑が目に入る。

この句碑は、小説家・徳田秋聲の句を刻んだもので、秋聲と寺の深い縁を示す証しとして建立されたものだ。秋聲の妻・はまと、同寺の住職を務めた 23 世の英洲はきょうだいであり、共に現在の上伊那郡辰野町小野出身である。この縁が、秋聲をこの寺に引き寄せたのだろう。金沢市に生まれ、「金沢の三文豪」と称される秋聲は、自然主義文学の代表的な作家として知られている。

短編小説「花咲く頃」には、義弟の英洲が住職となる「晋山式」に夫婦で参列した様子が描かれている。青山住職は「秋聲は以後もたびたび寺を訪れて執筆もしていた」と語る。秋聲は、師の小説家・尾崎紅葉の影響で俳句を始めたという。

昨年には『徳田秋聲俳句集』が発行され、その中から「山の井に木の葉沈みて秋の雲」という句が選ばれた。この句は、秋聲の直筆を基に刻まれている。青山住職は「井戸に木の葉が散って沈んでおり、その水面に秋の雲が映っている、そんな情景でしょう。寺の雰囲気合う句として選んだ」と説明する。